

◇碩學ベルツ博士 醫學博士山上
 甚三郎氏の近著である。日本婦人お
 花さんの良人として在留三十年日本
 の醫學の基礎工作につくしたベルツ
 博士は實に偉い人である、この人の
 日記と論文が流麗な文章で年代順に
 譯出されて四六版二百五十頁に收め
 られてゐる、近年これ程愉快によめ
 た書物は少ない(大阪市西區鹽町二
 丁目三金ニユース編輯部、二回)

人々醫學和邦

住吉区五丁目三三三

大正九年

大阪分

14. 8. 209

碩學ベルツ博士
 山上甚三郎抄編

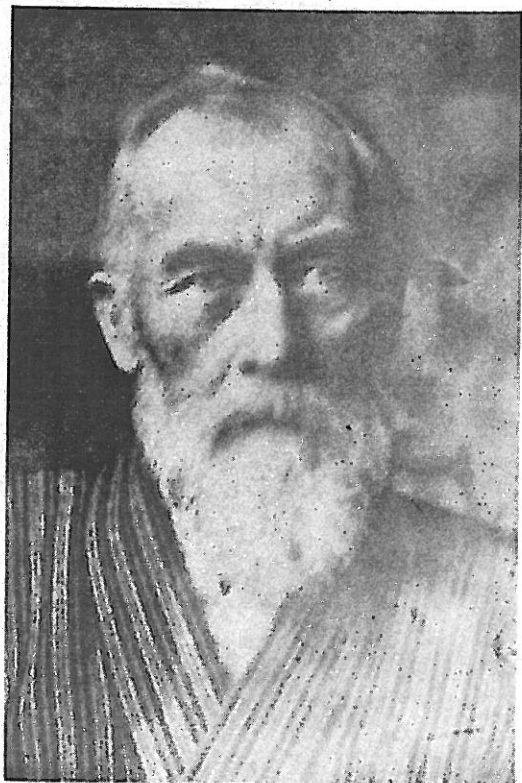
ベルツ博士傳は若波から渡邊博
 士の譯で出てゐるが、市電氣局
 病院の副科醫長山上博士がベル
 ツ博士の餘り執筆したのがこの
 日記抄である。譯者は醫學が未
 熟でと云つてゐるが、どうして
 極めて圓熟した譯出で、大體に
 要領よく出来てゐる。

目次は「故郷にて」から始まり
 「遺言徳氏の觀た父ベルツ」で
 終つてゐるが、年代別にかゝ
 れた日記でありながら、明治
 年代における外交談話が織り
 込まれてゐるので中々面白い

巻末に日本醫學小史及び索引が
 あり、四六版三百頁に足らぬ小
 冊ながら、ベルツの日本觀及び
 日本氣の精神が滿ち溢れ、日
 本なれば何人といへど驚れしく

覆める書物である(大浦生)
 (大阪市西區鹽町通二丁目三金
 ニユース編輯部二回)

XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX



ベルツ博士



ベルツ(息)徳;



ベルツ歌;



ベルツ夫人 花

序

日本に渡來した外人醫師で、日本人に忘れられない人が三人ある。それは、ケンブ
フー、シーボルト及びベルツである。之等三人は、日本醫學の父であると同時に日本
文化全汎に亘つての貢獻者であり且つ批判者である。

就中ベルツ博士は、その半生を日本に暮し、銳意醫學教育に従事した。當時恰かも、
排外思想の喧しかつた時代（一面には歐化熱もあつたが）であつたに拘はらず、終始
日本人の信頼を博したのは、以て博士の人格を洞察するに足らう。『ベルツ博士傳』は
日本夫人花さんとの間に出來た徳氏が、父の記録を入念に綴り合せ、獨逸で出來上つた
ものである。私は折に觸れて、此の書を読むのを樂しみにしてゐた。偶々、某書店か
らベルツ博士傳を書く様に依頼され、その原稿を作りつゝある中途、岩波から濱邊博

士の『ベルツの日記』が世に出たので、此の事業を断念した。

然るに、三金研究所の加藤信太郎氏が是非出版する様にとの意通で、遂に自分の原稿を整理したのである。内容は、日記、論文、演説、紀行、晩年のベルツ等で、殊に、日露戦争當時の『日本の反獨輿論の原因』の論文は、筆鋒余りに急なるため、獨逸一流新聞は、その掲載を断つた位である。斯程にまで、日本を愛したのである。

本書は、完譯でなく、私の興味ありと思つたところを抜萃し、自由に記載したのである。然し、語學力不足のため、却て博士の精神と異なる點が蓋し少くないであらう。之は豫め深く御断りして置く。

終りに、岩元不二雄氏には大變援助を受けた事を、深く御禮申し上げて置く。

昭和十四年六月 日

編者

目次

故郷にて……………	一
異郷の空にて……………	九
明治時代（論文）……………（一）……………	二八
岩倉公爵薨去す……………	三五
新しき故郷……………	六八
嘉納氏著「柔術」の序文より……………	七〇
菜食の大量榮養と勞働能力について……………	七五
日本に於ける獨逸人「ベルツ」に就て（シュミードル）……………	九八
明治時代（論文）……………（二）……………	一〇六
ベルツの講演概要……………	一〇六

東京への旅行	一八五
韓國への旅行	一八九
日本の世界進出	一九五
日本に於ける反獨輿論及び其の原因	二〇一
歸郷の旅	二〇六
晩年のベルツ	二二一
伊藤公追憶記	二三五
明治天皇の御聖徳を偲ぶ頌	二四二
遺兒徳氏の觀た父ベルツ	二五三

附

日本醫學小史
索引

故郷にて

一八四九年——一八七六年（嘉永二年——明治九年）

エルヴィン・ベルツ (Erwin Bälz) は、一八四九年（嘉永二年）南獨逸シニワールベンの小田舎町ビーチクハイムに生れた。十二歳の時に、高等學校へ入學して、其處で自然科學に深い興味を覚え、仁術たる醫業で身を立て様と決心をしたのである。其他地理、歴史、文化にも心を寄せ、未見の異國に強い憧憬を抱くに至つた。其の上法學にかけては殆ど天才的の閃めきを見せた。十七歳にて高等學校を首席で卒業した彼は、チュービンゲン醫科大學へ入學した。

一八七〇年（明治三年）に勃發した獨佛戰役には、軍醫補として従軍し、當時猖獗を極めた赤痢の撲滅には、心命を賭して力を竭くし、遂に自らも感染し、一時は生死の境を彷徨した。

一八七二年（明治五年）ライプチヒ大學に於て、ドクトルの免狀を受け、僅か二十三歳の弱冠にて、同大學病院の最高助手の任に就き、程なくして當代第一流の内科教授ウンダーリツヒの代理講師と迄昇進した。

斯くて彼は醫學に於て次第に非凡の才を示しつゝあつたが、同時に外國文化の研究にも心を傾倒した。語學はフランス語、英語其他にも堪能であつて、ダンテ、ドン・キホーテをも、原書で容易に讀破し得たのである。斯くして豊富な語學の力を驅使して、諸國の文化に對しても一家の見識を有し、既に二十五歳にして、獨逸國內は申すに及ばず、瑞西、

ウィーン、羅馬、倫敦、巴里の美術品に關して、一廉の鑑識眼を具へてゐた。

然るに、茲に彼の人生航路の方向を轉すべき機運に際會した。それは一八七五年（明治八年）の或日の事であつたが、彼を訪れて診察を乞ふた一人の日本人官吏があつた。親切なベルツは、此の身邊の少い外國人に、町重な治療を施し、慰める様に「日本はいゝ處でせうね？」と優しい言葉を掛けるのであつた。異郷にあつて受けた此の美はしい心根に、非常に感激した孤獨な此の日本人は、ベルツが日本を研究し度い希望があるならば、喜んで本國政府へ推舉しようと申出でた。之が端緒となつて、ベルツは二十六歳の時、恰度五年前に創設された江戸——東京醫科大學内科の正教授として日本へ赴任する事になつた。

當時の日記に斯う記してゐる。

一八七六年（明治九年）一月一日

昨年末余の一生を支配せんとする報告に接した。日本政府は余を招聘する事に決し、余の申出でた全條件に承認を與へた。斯くて余は、懐かしい故郷を遙か後にして、地球の半ばを隔てる遠い東亞の島國へ赴く事になつた。如何なる運命が待つてゐるかは、神ならぬ身の知る由もないが、不安の念は全然覺えない。決意は固く、寧ろ歡喜で胸も溢れる。憧れの夢が、正に實現されんとしてゐる。愈々西洋の文化を、優秀な東亞の民族に傳ふべき時が來たのだ。

一八七六年（明治九年）一月三日 伯林

本日、青木周造公使と契約の調印を交す。條項は左の通りである。

- (一) 江戸——東京の醫科大學に於ける生理學及び內科學の教師として招聘する事。
- (二) 年俸は一六、二〇〇圓とし、金貨を以て月割にて支給する事。

(三) 出張、旅行、住居は本人の自由意志たる事。

(四) 開業は之を許可する事。

出發迄には、猶二箇月を餘すので、三月に最後の講義を行ふ準備をなす。

一八七六年（明治九年）三月三十日

ライプチヒ

長らく親しくした友人、同僚、家族、看護婦及び友助手達と名残を惜しみつゝ最後の訣別の挨拶を交した。プラットホームに於ける白い手巾の波、手には「ナルコユリ」と徽替を抱く。

愉快だつたあの日この時。愛すべき友人の誰彼、親切な先輩。愉しかつた研究室の思出。

萬感交々胸に迫る。あゝ遠い島國で、懷郷病に罹る事も少くないだらう。

一八七六年（明治九年）四月二日

早朝二時四十五分、最愛の両親と、切ない別れを交す。今日の母の言葉は異國の空でも、

終生忘れる事が出来ないであらう。

茲に一言費さねばならない事がある。それは、ベルツが日本赴任以前既に有してゐた醫學的手腕の程度である。彼が名を挙げたのは、醫學の進歩の遅れてゐた日本に於てこそ出來た事であつて、大家泰斗の並び居る獨逸に踏み止つてゐたならば、斯ゝる名聲は到底望み得なかつたであらうとの説をなす者がある。然し之は間違つてゐると思ふ。日本赴任以前は、彼は未だ若輩ではあつたが、既に獨逸有數の醫學者であつたのである。开は次の事實が雄辯に物語つてゐる。

ベルツの恩師ヴンダーリヒ博士は、近世獨逸醫學の創設者であり、當時並ぶ者無き臨床醫家であつた。ベルツは此の泰斗の最高助手を勤め、然も學課に依つては代講する事さへ

あつたのである。彼の高名なストリュンベル教授も亦、當時此のヴンダーリヒ博士に師事して居たが、後年彼は次の如く述懐して居る。

『ヴンダーリヒ教授は慢性疾患臨床に出席する事は稀であつたので、余は當時の彼の最高助手、後東京に招聘されたベルツの指導を常に仰いだものであつた。青年時代に發表した余の論文は、ベルツの校閲を経たものを少しとしない。此の恩は余の終生没却出來ないところである』と。

此の最後の言葉は、ベルツの眞價を立證して餘りあるものがある。伯林へ留學して來た一日日本人學生に依れば、ベルツの研究室程日本で多數の研究生を擁して居るものは他に無いと云ふ事であつた。

又彼がヴンダーリヒ教授の代講を勤める時は、多數の學生が、教室に押し寄せ、此の若

い學徒の講義に傾聴するのであつた。ベルツは、得意然として實に光榮の至りだと喜ぶのであつた。

斯ゝる譯で、若し母國獨逸へ其の儘留まつて居ても必ずや、名を成したに相違ないのである。單に日本へ渡來したから、彼の研究が完成され實を結んだのではないのである。

其の上、人種、氣候を異にする他國にあつては、常に不動の決意と不撓の研究心を必要とした。ベルツは先づ正常な日本人の體格を精査し、然る後患者の研究に着手した。從來日本では未だ一般的研究の對象となつて居なかつた醫學即ち物理及び社會方面に關する醫學、例へば氣候、温泉、榮養と疾病との關係等に就いて、新分野を開拓して行つた。

ベルツは年々學界の信用を増し、其の研究、指導は萬人の刮目する所となつた。そして長い在職期間中、嘗て一度も學生に倦怠を覺えしめなかつたのである。此の一事丈でも彼

の人格、才能の非凡なるを察するに充分である。

異郷の空にて

一八七六年——一八八〇年（明治九年——明治十三年）

家族への書信

一八七六年（明治九年）六月九日 東京——江戸

二ヶ月間の長い航海を終へて、一昨日の朝早く漸く横濱に着きました。扱て私の第一印象を簡単に申上げる事にしませう、始めて日本の土を踏んだ時は、決して愉快だつたとは思ひきれません。伯林での話では、通譯と役人が、港に待合せて居る筈でしたのに、それらしい姿も見えないし、迎ひの辭もありません。已むなく、税關の小船に荷物を積んで